

令和4年度アドバイザーボード会議録

日 時：令和4年7月13日（水）14：00～15：15

場 所：Web 会議ソフト「Zoom」による開催

出席者：学外委員4名及び学内委員8名

開会に先立ち、各委員による自己紹介が行われた後、委員長から配布資料に基づき説明があり、以下のとおり議論を行った。

論点1. ドクコンについて

学内委員：キャリアサポートセンターでは、このドクコンについて見直しをしようと着手をしているところであるが、今年度は8月9日の開催日が迫ってきているので、基本的な形は従来通りの形を踏襲しようと思っている。ただし、参加学生を増やすことや学生の育成に貢献できるようにということを視野に入れている。具体的には、DC 学生に加えてポスドクの方も希望があれば是非参加してもらおうこと、JST 次世代プロジェクトの採択者の方には積極的にプレゼンをしていただくこと、なるべく DC 学生全員が出ていただくような形で協力いただくというようなことを考えている。また、学生の育成という視点では、プレゼンを行う学生には事前に私の方で研修を行うということを考えている。具体的には、面談を行い、異分野の方でも分かるような発表のコンテンツをどうやって作っていくかというようなことを中心に、研修という形で行っていきたいと思っている。また、企業の方には、なるべく研究開発の部分でどのような働き方をされているかといったことをご紹介いただくと大変ありがたいと考えている。ただし、元々マッチングそのものの数が非常に少ない状況なので、ブース形式にして、そこまで踏み込んでやるのかといったところは決めかねているところである。

イベントを通して、やってお終いということではなくて、やった後に興味を持った学生と企業をつなぐというところをキャリアサポートセンターの方で引き続きフォローアップをしていきたいと考え、このような計画を作成している。

委員長：ドクコンについては主旨をはっきりさせつつ、今後も続けていかなければならないと考えている。他大学においても DC 学生のキャリア支援目的での企業とのイベント等は行われており、本学の当初の主旨でもあったマッチングを目的としたやり方をメインに据えて、もう少し工夫して続けていくべきなのだろうかと考える一方、それともそのような主旨は残しつつも学生の教育の一環というニュアンスを強めていくべきなのだろうかとも考えている。ただし、そうすると単位の中に組み込んでしまえばよいであるとか、企業の方に付き合っていただくのは申し訳ないのではないかと等々意見が想定され、まだクリアに方向性を決めかねているところである。ドクコンについて、特に産業界の方から見て、こういう風にしないと付き合いきれない等であるとか、何か率直にご意見をいただければと思う。

学外委員：DC コースを選択する学生の動機によるのではないか。何十年も前の話であるが私自身が大学生の頃、DC コースを選択する学生は研究をやりたいから DC コースに行くという思いがあった。留学生と一般の学生でだいぶ比率が違うようだが、そこも実は実態を見なければダメなのではないかと思っている。全ては留学生にしても一般の学生にしても DC コースを選択した動機が非常に大事で、いつかは企業の研究部門に就きたいから DC コースを選択したのか、それとも専門分野を突き詰めていきたいから DC コースを選択したのかによって、先ほどの企業のマッチングのところでも、どこの企業に声をかけるのかということも変わってくるのではないかと思っている。従って、この研究に特化して研究をやりたいのだという学生さんが多いようだ、企業を選ぶ時やマッチングするときも、この企業のどこかの研究機関にも声をかけるような両方のニーズをマッチングさせる取り組みの方が大事なのではないかと思っている。その辺りの最近の学生はどういう考え方なのか。

委員長：昔と変わらない学生がある程度のボリュームでいることは確かであるが、世の中の掛け声もあって、産業界というのを一切考えずに自分の研究を続けたいだけではない学生の比率は、昔と比べて増えてきているように思う。

現状、一般の日本人学生の割合はそれほど多くはなくて 13% ぐらいである。資料 1-3 において過去に遡っての進路状況を記載しているが、平成 26 年度以降入学者でいうと社会人と不明を除く日本人学生 15 名について、大学・研究機関に就職したのが 12 名、民間企業に就職したのは 3 名ぐらいである。結果論であるが日本人学生については、明らかにまだ自分の研究をメインに考え、就職先もそのようなところになっていると思う。意外と留学生については、66 名の内、母国に帰った者が 34 名いるが日本に残って就職した者が 32 名もいて、内訳を見るとアカデミックが 26 名、民間企業で 6 名いる。留学生であるから産業界が目に入っていないという訳ではなく、率で言うとそれほど日本人と違わない。ただし、アカデミックが多いのは確かなので、進路動機もやはり研究オリエンテッドで入ってきている学生がまだかなり多いのではないかということは予想される。

学内委員：本人の DC コースを志望される動機ということについては委員長がお話しされた点があるかもしれない。ただ、ご案内のように、研究職として、明確にいうと大学の研究者としてのポジションの数が残念ながらそう多くない。つまり、キャリアとして DC コースを出てその次のキャリアパスが相当なハードルになっているという認識が必要で、留学生もそのように認識している。もう一方の側で、これは勝手な想像であるが、特に外国での仕事をするような場合にはそうだと思うが、企業の方でも学位を持った人を取りたいと思っており、大学の教育の仕方と産業界で欲しいと思っている姿の間に、ある種のギャップがあるという認識を大学は既に持っている。そこを埋める努力の一つとして、こういうような活動があるという風にも認識をしていただければありがたい。

委員長：一つ、言わなければならないことに気が付いた。資料では圧倒的にアカデミックに就職しているように見えるが、実はアカデミックのところはポスドクであるとか任期付き

でパーマネントではない職を含んでおり、最終的にずっとここに位置していることはいかかもしれないことを補足する。

学外委員：資料の民間企業に就職されている方について、マッチングが実現していることを踏まえると、どのような企業側のニーズがあって、この DC 学生を就職に導いたのかというのが良好事例になるのではないかと思う。その辺のニーズを踏まえた上で、マッチングしそうな対象企業を選ぶのはいかがか。大企業になると色々な部署もある。

最近では、弊社もそうであるがカーボンニュートラルであるとかゼロカーボンに向けた取り組みがあって、今まで誰も経験したことのないような取り組みには必ずイノベーションが必要だと言われている。そういったところには DC を専攻した学生が来ていただくのと技術革新に貢献してもらえないか、まさにマッチングができるのではないかと考えて聞いていた次第である。

委員長：民間企業へある程度の就職者数があり、遡ってどういう繋がりか調べることも重要だと考えているが、おそらく大学としてシステムティックに就職の世話をしたというよりは、指導教員の伝手がメインだったのだろうと思う。それだけでよいのかと思いつつ、ドクコンを企画した意図の中には、パイプを太くするということも考えられていた。

学外委員：ドクコンについて、冒頭の説明ではポスドクも参加されると仰っていたが、目的がぶれないかと危惧している。研究オリエンテッドでいくのであればポスドク、就職先を見つけるのであれば研究に拘らずにドクコンといった棲み分けが必要なのではないかと。どっちつかずになってしまうのではないかと感じたところである。

学外委員：あくまでも民間企業への就職の実現に資することを目的という前提であるので、この点について意見させていただく。ドクコンに参加される対象学生としては、6割ぐらいが留学生で、次いで社会人、一般の日本人学生は数名程度である。その内、民間企業に就職を希望している学生も果たして研究職を希望なのか、あるいは自分の研究キャリアに拘らずに興味のある分野への就職のきっかけにしたいのかという点、特に留学生が多い中で我々受ける側の民間企業としては、その点が明確になっていないと、なかなかマッチングという意味ではニーズとシーズでいうようなところがうまく一致しないのではないかと印象を持っている。

留学生においては、日本に帰化して、本当にずっと日本に就職あるいは研究を行う意思があるのだろうかといったところがあり、採用については少々考えてしまうようなところもある。そもそも日本人の DC 学生においても、入社してからも自分の希望どおりの仕事ができない場合にすぐ退社してしまうのではないかとといったこともあり、DC 学生には期待する半面、入ったあともどうなのかと考えるところもある。能力をきちんと発揮していけるような部署で働いていただけなのかといったことも我々自身が考慮しなければいけないという意味では、参加学生の今後の自分のキャリアの方向性をもう少し明確にした上で、マッチングを進めることが一つ重要なポイントになるのではないかと考えている。

委員長：今年度のドクコンについては、今までの延長上で両方の意義をミックスしながら、実

力のありそうな JST 次世代プロジェクト採択学生にその場で色々なことをアピールしてもらおう場にしかならないかもしれないが、今後については、いただいたご意見を加味して方向性を考えることになるだろうか。キャリアサポートセンターとしてはどのように考えているのか。

学内委員：キャリアサポートセンターとしても実情を考えると留学生を含めて個々に目指す方向や希望が違うので、一色淡にしてドクコンで完結させるという考えではない。なるべく指導教員と話をしながら、志望がどういう方向だろうか、本人はどう考えているのだろうかということ聞いた上で、キャリアサポートセンターが支援できる学生に対しては支援を行うスタンスを考えている。むしろアカデミアを目指すといった際、指導教員の方でそのためにヒューマンネットワークを使って導いていくというように指導教員とキャリアサポートセンターで協力しながら、学生の個別にオーダーメイドで支援をするようなことが一つ可能性としてはあるのかなと思っている。ドクコンを今後どういう風に位置付けるのかというのは、今すぐ私の方でも回答ができないが、それを行っていく中でこれから検討させていただきたいと思っている。

委員長：「こういうことを目指す学生に対して企画します」というように、ある程度限定的にやらないと、全部に薄く広くという感じでは続いていけないという感じであろうか。みなさまのご意見を伺いながらそのような印象を受けた。

今回のご意見だけでということではなくて、今後も実施しながら最終的にどういう形や方向性で続けていくかということを議論させていただきたいと思う。

論点 2. 次世代イノベーションを駆動する異分野融合博士人材育成支援プロジェクトについて

学外委員：この補助金を与えたその後の成果の評価、フォロー等は何かなされるのか。経済的な理由で研究が続けられない学生の支援ということであれば分かりやすいが、次世代イノベーションを駆動する人材育成というのは、なかなか定量化が難しく、本当に支援して効果が生まれたのかどうか、評価を繰り返していかないと、仕組みとして上手くいかないのではないかと思った。

委員長：その通りであると思う。まだ四ヶ月しか経っていないので、今まであまり学生が接することがなかったような講演会であるとか、何かに参加する機会であるとか、そういうものを積極的に紹介し、お尻を叩いているというところで現在は精一杯である。

今後はこれらの資金を利用して、例えばであるが、海外から一流の方を呼んできて講演会をした後で学生を交えたやり取りの機会を増やしていくというような特有のコンテンツをどう構成するかということ、現在、統括を中心にやっているところである。その成果は、いつかは現れてもらわないと困るところであるが、四ヶ月では他の学生と明確な差がつくような形では、まだ出てきていないとしか申しあげられなく、辛いところである。

学外委員：私もイノベーションを駆動するということに引っかかりがあり、それをどうやって

書類選考で評価をするかというのは、非常に難しいと思っている。今様々な企業が取り組んでいるのは、ありがたい姿をまず描いて、そこからバックキャストで、何から取り組んでいけばよいのかという進め方をしている。Society 5.0の姿をまず描いて、何から研究、もしくは技術開発をしていくかという取り組みをしているのが大半の企業だと思う。そういった意味で学生にそれを求めるのは辛いところがあるかもしれないが、学生としてありがたい姿を描いてもらって、それに向けて何から取り組んでいくのかというのを申請書のフォーマットで描いてもらうというのが、正にイノベーションを駆動する人材になるのではないかと思った次第である。

それと同時に、面接がされていないということであれば、面接も行った方がよいのではないかと思う。本人の思い、決意といったものも非常に大事であると思う。ただ単に生活費を稼ぐためにという思いではなく、イノベーションを起こすという意味であれば、自分はこういう夢を描いていて、それに向けてこのような研究をしていくのだというのを本人の口から説明してもらった方がよいのではないかと思う。問題は「どうやって」というのが大事だと思う。先生方の評価を見させてもらっているが、まさにそこを非常に重視されている評価であり、私も同感な評価をしている。そのようなところも面接を通して確認していただければよいと思う。

委員長：このプロジェクトは本学だけではなく色々な大学で実施され、有り体に言えばDCの経済的支援というのが裏のテーマで行われている。どのような学生を選抜するかは当然大学の考え方があり、何でもよいという訳ではなく、本学の場合にはコンピュータ科学分野をある程度前面に立てて、自分の分野に利用して広げていくということに意欲のある学生、あるいは少しでも実績、ポテンシャルが見える学生を選ぶということになっている。ここをバックアップするセンターはコンピュータ科学人材育成センターとなるが、バックアップの機能がまだ四ヶ月で進んでいないということもあって、見えにくいという状況になっている。

学外委員：みなさまの意見を聞かせていただいた中で、選抜の時に面接が必要ということは私も感じた次第である。先ほどドクコンの方で、企業との面談という話題があった時に思ったことは、DCの学生なので学会発表等でプレゼンテーションをすることは当然多いと思うが、そういったアカデミックな発表とは別に技術営業的、言葉は悪いが売り込みというようなプレゼンテーションをする場を練習する場としてドクコンであるとか、こういった選抜での場を活用していただければよいのではと感じた。売り込み方はおそらく技術発表とは変わってくるので、どうやって短い時間で自分を売り込むかになるのではないかと思う。

また、支援期間が終わった際の成果発表についても簡単なプレゼンテーションをしていただいて、何をしたかというのを確認するのがよいのではないかと思う。ペーパーだけでは見えないものもあるのではないかという風を感じている。

委員長：プロジェクト終了時のプロセスに関しては、初年度となるこの3月はあまりにも慌ただしく、上手くそこまでできてはいなかったのだが、そこについても議論しなければい

けないと思っている。

学内委員：同じ学内にいながらもこの件については何もコントリビューションしていないので、そういう意味からも発言をさせていただく。先ほどからお話しがあったとおり、ありがたい姿、今度は学生さんにとっての姿として、どういう人を取りたいということが、本当に今のやり方で取れたかという評価がベースではないかと思う。四ヶ月経ってしかいないとしても、思っていた人が取れたか、つまり異分野融合のイノベーションの人材足る候補者が上手く取れたかどうかの評価をした上で、どういう項目に重点を置いた方がよいかというようなことが出てくるのかと思う。学生が持っている計画やビジョンがベースだろうと思うが、それでも相当色々な項目についてその重みを判断していると思うので、その内、どこを大事にすればよいのかということについて、実績をベースに用意していくのがよいと思う。思った人が本当に取れたか、取れたのであればそのまま結構で、そうでなければどこが悪いと思っているのかではないかと思う。

委員長：今後のやり方というのは、まず総括から出発ということもその通りだと思っている。

報告1. 大学院博士後期課程における教育の現況について

委員長から、依然続くコロナ禍における大学院博士後期課程の教育の現況について資料に基づき説明があった。

以 上